

健康寿命の延伸とキャリア教育の関連

The relation between Healthy life extension and Career education

戸田 里和
Satowa Toda

大妻女子大学人間生活文化研究所
Institute of Human Culture Studies, Otsuma Women's University

キーワード：高齢者イメージ，大学生，コミュニケーション，キャリア教育
Key words：Elderly image, University student, Communication, Career education

1. 研究目的

我が国では高齢化が急速に進んでいる。国立社会保障・人口問題研究所が公表した将来推計人口によると、65歳以上の老年人口割合は2035年には33.4%と予測されている。このような中で、高齢者が住み慣れた地域で自分らしい暮らしを人生の最後まで続けることができることは重要であり、地域包括ケアシステムにもとづく地域づくりが求められている。しかし、核家族化が進む今日では、児童・生徒・学生らにとって地域に住む高齢者を理解することは困難であると推察される。

一方、2011年度からは大学の教育課程に「社会的・職業的自立に関する指導等（キャリアガイダンス）」が義務づけられた。大学でのキャリア教育が浸透する中、利己的な態度の強い学生は、「進路選択に対する自己効力」に対してマイナスな影響を与えることが示唆された¹⁾。働かずに生活できるなら、働きたくないという男子学生や「自由・ラク」を求める女子学生に対して、現状のキャリア教育は、学生の育つ方向性や志向性に任せて才能や意欲を望むまま伸ばすような指導方針が多いと考えられ、さらに関係性が疎遠になることが懸念される。それゆえ、他者との関わり・社会とのつながりを視野に入れて取り組むべきキャリア教育が必要とされる。その一策として、高齢者への理解を深めることや、高齢者支援を実践する力の育成などの教育施策を検討するためにも、若者らが持つ高齢者理解や高齢者支援への関心の実態を明らかにする必要がある。

本研究では、静岡県と関東圏の2つの地域に住む若者らが持つ高齢者の生活に関するイメージと高齢者を支援する社会資源の関心、コミュニケー

ションに関する実態を調査し比較する。これらの結果から、地域包括ケアシステムの構築を推進する各地域において、若年層の「関係的自立」、「社会的・職業的自立」に向けた教育指導と健康寿命延伸のための方策を探るための基礎資料を得ることを目的とする。

2. 研究実施内容

本研究は、静岡県（西部・中部）と東京都在住の中学生と大学生を対象とした調査を計画し準備していたが、予算の減額により対象地域ならびに対象者数等の見直しを余儀なくされた。そのため、5月に対象者の再選定作業を行った後、調査依頼ならびに調査票の見直しを行った。アンケート対象者は、静岡県（中部）と都内の大学に所属する学生に範囲を絞った。具体的な実施内容と手順は、以下のとおりである。

(1) 調査対象および時期

静岡県中部地区にあるA大学と都内にあるB大学に所属する学生（200名）を対象とした。調査実施時期は6月～9月授業内にて調査票を配布し回収した。

(2) 調査内容

はじめに①年齢、②性別、③居住地域を問い、次いで家族や高齢者に関する質問項目、④祖父母との同居、⑤祖父母との同居経験、⑥日常生活に支援が必要な祖父母との同居経験、⑦祖父母と会う頻度、⑧祖父母の年代、⑨老人ホームの訪問経験、⑩お年寄りの予想年齢について回答を求めた。また、⑪高齢者の生活に関するイメージ、⑫高

高齢者を支援する社会資源に関する質問, ⑬コミュニケーション・スキルに関する質問, ⑭交友ネットワークに関する質問については, 項目ごとに設定した選択肢により回答を求め得点化した。

(3) 調査内容

集計・分析には, Microsoft Excel 2013 と統計解析ソフト IBM SPSS Statistics 21.0 を用いた。

(4) 成果

有効回答者数は, A 大 95 名 (平均年齢 20.3 歳; $SD=1.87$), B 大 90 名 (平均年齢 19.3 歳; $SD=.49$), 計 185 名 (回収率 93%) であった。両学生を比較するため, 調査内容①~⑩の基礎集計結果を表 1 に示す。

表 1. 基礎集計結果

大学	都道府県	A 大 : 静岡	B 大 : 東京
年齢	(歳)	20.3	19.3
性別	全体	(95)	(90)
	男子	71.6 (68)	
	女子	28.4 (27)	100.0 (90)
居住地域	東京都		64.4 (58)
	神奈川県		20.0 (18)
	静岡市	30.5 (29)	
	藤枝市 その他	26.3 (25) 43.2 (41)	15.6 (14)
祖父母との同居	同居	35.8 (34)	15.6 (14)
	非同居	63.2 (60)	84.4 (76)
	NA	1.0 (1)	
祖父母との同居経験	経験有り	61.1 (58)	40.0 (36)
	経験なし	37.9 (36)	60.0 (54)
	NA	1.0 (1)	
日常生活に支援が必要な祖父母との同居経験	経験有り	26.3 (25)	11.1 (10)
	経験なし	70.5 (67)	88.9 (80)
	NA	3.2 (3)	
祖父母と会う頻度	毎日	35.8 (34)	14.4 (13)
	半年 1・2 回	15.8 (15)	11.1 (10)
	月 1・2 回	18.9 (18)	17.8 (16)
	年 1・2 回	9.5 (9)	30.0 (27)
	週 1・2 回	9.5 (9)	20.0 (18)
	1 年会わない	7.4 (7)	2.2 (2)
	NA	3.2 (3)	4.4 (4)
祖父母の年代	父方祖父母		
	80 歳以上	36.8 (35)	34.4 (31)
	70~79 歳	26.3 (25)	37.8 (32)
	60~69 歳	11.6 (8)	7.8 (7)
	60 歳以下	2.1 (2)	0.0 (0)
	NA	23.2 (15)	20.0 (20)
	母方祖父母		
	80 歳以上	32.6 (30)	31.1 (28)
	70~79 歳	37.9 (36)	47.8 (42)
	60~69 歳	12.6 (9)	10.0 (9)
60 歳以下	3.2 (3)	0.0 (0)	
NA	13.7 (17)	11.1 (11)	
老人ホームの訪問経験	経験有り	41.1 (39)	66.7 (60)
	経験なし	55.8 (53)	33.3 (30)
	NA	3.2 (3)	
お年寄りの予想年齢	80 歳以上	5.3 (5)	7.8 (7)
	70~79 歳	34.7 (32)	35.6 (32)
	60~69 歳	46.3 (44)	53.3 (48)
	60 歳以下	11.6 (10)	1.1 (1)
	NA	2.1 (4)	2.2 (2)

数値 : % 実数 : ()

【相違点】 静岡にある A 大学に所属する学生 (以下, A 学生) は, 祖父母との同居率が 35.8% であり, 都内にある B 大学に所属する学生 (以下, B 学生) の 15.6% に比べ, 高齢者との同居率は高い。B 学生の老人ホームの訪問経験は 66.7% と, A 学生の 41.1% に比べ高い (表 1)。

【共通点】 「お年寄り」をイメージする平均年齢は, A 学生 65.1 歳, B 学生 67.5 歳であった。予想年代別に見ると, 両学生とも 60 代が 46.3 (A 学生) ~54.4 (B 学生) % と最も多く, ついで 70 代の 34.7 (A 学生) ~35.6 (B 学生) %, 80 代の 5.3 (A 学生) ~7.6 (B 学生) % の順であった (表 1)。以上のことから, 60 代からお年寄りと思う学生が多いことが示唆された。

【⑩高齢者の生活に関するイメージ】

高齢者の生活に関するイメージについての質問項目は, 小山ら (2016) [2] の行った中学生を対象とした調査の 12 項目を使用し, まったくそう思わない (1) から, とてもそう思う (5) までの 5 件法で回答を求めた。両学生の平均値と標準偏差を表 2 に示す。

表 2. 高齢者の生活に関するイメージ

高齢者の生活に関するイメージの項目	A 大		B 大	
	M	SD	M	SD
①病気を抱えながら家で生活していることもある	3.39	1.07	3.70	0.88
②運転能力が低下して危なくなるので, 自動車の運転をしなくなる	3.35	1.05	3.27	1.15
③家族や友人と会ったり, 話をすることを楽しみにしている	4.20	0.88	4.20	0.99
④急ごうと思っても, ゆっくりとした動作になってしまう	3.82	0.99	3.97	0.94
⑤自分でできることは若い人に頼らず, 自分でしたいと思っている	3.75	1.07	3.60	0.96
⑥物忘れがひどくなり, 自分が今何処にいるかわからなくなることもある	3.35	1.13	3.25	1.07
⑦膝や腰が痛くなり, 重いものを運んだり, 長い距離を歩くことが大変になる	4.24	0.92	4.33	0.75
⑧趣味や楽しみを持って生活したいと思っている	3.89	1.01	4.09	0.76
⑨新聞や書類の小さな文字が読みにくくなる	4.19	0.27	4.42	0.62
⑩毎日の食事をつくること, 面倒になることもある	2.98	1.02	3.03	1.10
⑪自分の健康について関心が深い	3.61	0.95	3.73	0.95
⑫着替えや外出に手伝いが必要になることもある	3.31	1.03	3.47	1.00

両学生とも平均値が 4.0 以上であったのは, 「③お年寄りは, 家族や友人に会ったり, 話をすることを楽しみにしている」「⑦膝や腰が痛くなり, 重いものを運んだり, 長い距離を歩くことが大変になる」「⑨新聞や書類の小さな文字が読みにくくなる」の 3 項目あり, 「そう思う」側に寄っていた。一方, 両学生とも「そう思わない」のは, 「⑩毎日の食事をつくること

が、面倒になることもある」であり、2.98 (A 学生), 3.03 (B 学生) と、最も低値であった (表 2)。

両学生とも高齢者の身体的加齢変化について一定のイメージを持つ一方で、身体的加齢変化によって、日常生活に困難が生じるイメージは持ちあわせていないことが示唆された。

【⑫高齢者を支援する社会資源】

高齢者を支援する社会資源の質問項目については、前述の小山ら (2016) の調査 9 項目を参考に、静岡地域の資源が含まれるように配慮した。(1) 存在と用途どちらも知らない、(2) 存在は知っているが用途は知らない、(3) 存在と用途どちらも知っている、の 3 つの中から 1 つ選ぶように求めた。両学生の「知っている」資源に注目するため、(2) 存在は知っているが用途は知らない、と (3) 存在と用途どちらも知っている割合を表 3 に示す。両学生とも「訪問看護」は、93.7% (A 学生), 98.9% (B 学生) と最も知られていた。一方、半数を下回った資源は、B 学生の「防災行政無線」23.3%、「給食サービス」34.5%であった (表 3)。防災行政無線の存在については、行政による広報等の差 (地域差) が反映される結果となったと考えられる。

表 3. 高齢者を支援する社会資源

高齢者を支援する社会資源の項目	A 大			B 大		
	存在	用途	計	存在	用途	計
① 防災行政無線	37.9	16.8	54.7	14.4	8.9	23.3
② 送迎車	38.9	45.3	84.2	28.9	56.7	85.6
③ 訪問看護	28.4	65.3	93.7	8.9	90.0	98.9
④ 郵便局や銀行、市役所にある眼鏡やルーペ	20.0	70.5	90.5	5.6	91.1	96.7
⑤ 買い物宅配サービス	28.4	60.0	88.4	11.1	82.2	93.3
⑥ 集会所 (高齢者用サロン)	46.3	24.2	70.5	35.6	30.0	65.6
⑦ 市内巡回バス	37.9	48.4	86.3	33.3	46.7	80.0
⑧ 給食サービス	29.5	21.1	50.6	18.9	15.6	34.5
⑨ 青信号延長用押しボタン	24.2	30.5	54.7	8.9	53.3	62.2

【⑬コミュニケーション・スキルに関する質問】

言語および非言語による直接的なコミュニケーションを適切に行う技能であるコミュニケーション・スキルを測定する尺度: ENDCOREs (藤本・大坊, 2007) ¹³⁾ を用いて分析した。この尺度は、「自己統制」「表現力」「解読力」「自己主張」「他者受容」「関係調整」という 6 つの下位スキルが測定され、前者の 3 つは基本スキル、後者の 3 つは対人スキルに分類される。「普段のコミュニケーション

場面におけるあなたの行動について回答してください」と教示した後、24 項目について、かなり得意 (7) から、かなり苦手 (1) までの 7 件法で回答を求めた。従来モデルを評価するために、全データ 185 名について、各スキルの α 係数および平均値とデータ分布を確認した。その結果、藤本・大坊 (2007) とほぼ同様の傾向が確認された (表 4)。自己統制の α 係数についても、藤本・大坊 (2007) の結果と同様、他の 5 つのメインスキルに比べ低値となった (表 4)。

表 4. 各スキルの α 係数および平均値

本研究	α	M	SD	藤本・大坊 (2007)			
				α	M	SD	
自己統制	.709	4.39	1.00	自己統制	.678	4.80	0.95
表現力	.846	3.93	1.28	表現力	.891	4.32	1.97
解読力	.894	4.72	1.12	解読力	.931	4.97	1.20
自己主張	.795	3.97	1.17	自己主張	.836	4.15	1.24
他者受容	.835	5.12	0.99	他者受容	.835	5.34	0.97
関係調整	.819	4.60	1.07	関係調整	.820	4.99	1.03

【性差の検討】

藤本・大坊 (2007) による性差の検討では、自己統制においてのみ有意差が認められた。本研究も同様に、男女のコミュニケーション・スキルの違いについて検討した結果、自己統制 (男性 4.65, 女性 4.24; $t(178) = 2.67, p < .01$) と自己主張 (男性 4.30, 女性 3.77; $t(180) = 3.01, p < .01$) の 2 つのメインスキルに有意差が確認された。そこで各下位概念について個別に検討したところ、自己統制については、欲求統制 (男性 4.52, 女性 3.96; $t(179) = 2.60, p < .01$)、感情統制 (男性 4.60, 女性 4.04; $t(181) = 2.56, p < .05$)、道徳観念 (男性 5.06, 女性 4.63; $t(181) = 2.31, p < .05$) で有意差が確認された。また、自己主張では、論理性 (男性 4.43 女性 3.57; $t(181) = 3.93, p < .001$)、と独立性 (男性 5.06, 女性 3.87; $t(181) = 2.60, p < .01$) に有意差が確認された。男性は女性に比べて欲求や感情を制御し、行動の善悪を判断基準にしていることや、論理性や独立性についても高く、自分の意見や立場を相手に受け入れてもらえるように主張する可能性が示唆された。

【⑭交友ネットワークに関する質問】

交友ネットワークは、学生の高齢者イメージとコミュニケーション・スキルとの関連を調べるた

め補助的に質問された項目である。現在もつきあいがあり、友達と呼べるような人たちの人数を「入学以前」「学内の学科・クラス」「学内のサークル・部活」「学外の趣味」「アルバイト」「住んでいる近所」の人という6つの関係ごとにわけて尋ね、「1人」「2人」「3～5人」「6～7人」「10人以上」「なし」の6つからそれぞれ1つずつ選ぶように求めた。全体的な傾向を見るため、両学生の基礎集計結果を表5に示す。友人の有無に着目すると、「②学内の学科・クラスの友人」が最も多く、94.1%であった。一方、友人がいないのは「⑥住んでいる近所の人」の49.2%であり、約半数の学生は、近所づきあいが無いことが示唆された。

表5. 友人の人数

	1人	2人	3～5人	6～9人	10人以上	なし
①入学以前からの友人	9.2	10.3	29.2	11.9	24.3	13.0(2.2)
②学内の学科、クラスの友人	2.7	10.3	30.3	26.5	24.3	4.3(1.6)
③学内のサークル、部活の友人	2.7	6.5	20.0	10.8	18.9	37.8(3.2)
④学外の趣味等の友人	5.4	8.1	23.2	11.9	24.3	24.9(2.2)
⑤アルバイト等の友人	8.6	11.4	21.6	7.0	10.8	38.4(2.2)
⑥住んでいる近所の人	8.1	8.1	18.4	4.9	9.2	49.2(2.2)

数値: % NA: ()

3. まとめと今後の課題

前述した理由により、本研究は、調査対象者の再選定やデータ入力作業等に時間を費やした。そのため、2大学の基礎集計と基礎集計結果を用いた大学間比較ならびにコミュニケーション・スキル ENDCORES モデルの再検証と一部の比較・性差の検討までの分析となり、各要因間の関連についての分析が期間内に終わられなかった。今後の課題は、これらの分析を継続し、本研究によって得られた知見は、学会・論文等で発表する予定である。

付記

本研究は、大妻女子大学人間生活文化研究所の研究助成（R2904）を受けたものです。

参考文献

- [1] 戸田里和（2015）「ネット利用・利己的態度およびキャリア意識の相互影響に関する研究：大学生の横断調査と縦断調査に基づく検討」博士論文、上智大学
- [2] 小山晶子・濱本洋子・佐藤鈴子（2016）「中学生が持つ高齢者の生活に関するイメージと高齢者を支援する社会資源への関心の実態：「健康長寿都市」を目指すS市を例として」、『日本公衆衛生雑誌』48, 201-216.
- [3] 藤本学・大坊邦夫（2007）「コミュニケーション・スキルに関する諸因子の階層構造への統合の試み」、『パーソナリティ研究』15, 347-361.